エッセイ

渤海国・我が故郷

SCE・Net 鈴木紹夫

E-28

発行日
2011.10.03

筆者は 1940 年（昭和 15 年）、満州国牡丹江市北郊の満鉄社宅街で生まれた。牡丹江市は渤海国の首都、上京龍泉府（現・寧安市）の北、約 80km に位置し、いずれも広域牡丹江市域に含まれる。牡丹江市は筆者の出生当時、関東軍第 1 方面軍の司令部が置かれていた軍都であり、また満州国東北部における満鉄鉄道網の中心地でもあった。

渤海国とは

渤海国は西暦 698 年から 926 年の 228 年間、現在の中国東北地方（旧満州）東部、朝鮮半島北部およびロシア沿海州南部にまたがる広大な地域に立地した古代国家である。この建国時期は日本では律令時代、平城京への遷都（710 年）の 13 年前に当たり、その立国期間は奈良時代を経て平安時代前期の約 130 年間に相当する。

渤海国版図（上京龍泉府遺跡案内板より）

渤海国は建国以前、その国土となる地域の南部を占めていた高句麗が唐および新羅の圧迫を受けて滅亡した後、残された王族の一部を支配層に、ツングース系の狩猟民族を主とし、扶余系の農耕民族を複合して立国した国家とされる。建国当初はこれを属州にしようとする唐と対立関係にあり、渤海国の後背地に当たる朝鮮半島南部にあり敵対していた新羅と唐との挟撃にあって軍事的に不安定であったため、日本との同盟強化を意図して渤海使（献日本使）を派遣してきた。正に「敵のその先は味方」の国際政治力学の実践といえる。これが平城京へ遷都の後、奈良時代の西暦 727 年のことである。

渤海国がその後、唐を宗主国として朝貢する関係に落ち着いて安定化するに伴い、渤海使（渤海国→日本）は軍事目的から文化、経済交流目的に変化したが、立国期間中を通して連綿と継続し、最終的に 34 回に達した。さらにこれに対するお返しの遣（送）渤海使（日本→渤海国）も 15 回を数え、この往復、合計 49 回の往来はこの時代の国際交流としては異例の濃密さであったと言える。因みに同時代の遣唐使および送唐使の数は数え方によって 12 回から 20 回と諸説あるが、最大 20 回としても渤海国との交流の回数の半分にも満たない。

大陸との交流 ― 北方日本海ルート

渤海国建国以前、この地にあった高句麗が飛鳥時代（6 世紀後半～7 世紀始め）、通常、往来が容易で一般的と考えられている朝鮮半島南端から島伝いに来航するルートを取らず、敵対する新羅を避けて直接日本海を横断し使節を送り込んできていたことが知られている。渤海国建国時も新羅の位置づけは変わっていないので、渤海使も当然このルートをたどって来航することになる。

渤海使の前半は出羽の国、現在の秋田県に到着することが多く、出航地はロシア沿海州南端のグラスキノ付近と目されている。その後、渤海使の後半になると出航地は南に移り、

北朝鮮の咸鏡南道、北青付近から出て石川県（能登、加賀）から島根県（出雲）にかけての各地に到着するようになる。

この日本海横断ルートによる渡航は、大陸から日本へは冬、日本から大陸へは夏の季節風を利用しており、両端がほぼ閉じられている日本海では確実に目的地近くに到達できる。同時期の遣唐使は九州北部から東シナ海を横断するルートを取っており、しばしば大嵐に遭遇して南シナ海をベトナム方面にまで流されたことがあるのに比べ信頼性が高い。

上京龍泉府城壁

数少ない遺物
（蓮弁八角石灯籠）

城壁上より宮城跡を望む

海の北みち

石器時代から縄文時代にかけて、アジア大陸と日本列島との間の人と文化の交流は北方ルートを経由してなされていたことが北海道から東北北部にかけて発掘される多くの遺跡が物語る。大陸→間宮海峡→樺太→宗谷海峡→北海道→津軽海峡→本州東北地方とたどるルートは陸地が完全に視認できる距離の範囲でつながっており、古代人でも容易に行き来できる。これを新野直吉元秋田大学学長は「海の北みち」と名づけ、東北地方の北部日本海沿いに北方系の白人種の血がもたらされ、これがこの地に美人が多い理由の一つに挙げているのは興味深い。

時代が下がって渤海使の交流は船と航海術の進歩によりこれほど大回りしなくても日本海を直接横断して行き来できるようになったが、初期の渤海使が秋田県に多く到着したことと関連づけ、大陸との間の人間および文化の交流における海の北みちの重要性を主張されている。

渤海国の滅亡 ― 「謎の渤海国」となったわけ

渤海国は 926 年、契丹族（蒙古系）によって滅ぼされた際、国土と文化を徹底的に破壊されたため歴史を物語る史跡や文書が現地にほとんど残っていない。さらにこの国土の跡

地にはその後20世紀に至り満州国が建国されるまで国家らしい国家が建国されたことがなく、いわば国際社会において真空地帯のように取り残され、国家の歴史が現地においては抹殺されてしまったような状況となった。

このような中でわが国との間の渤海使、献渤海使の交流は日本書紀などわが国の史書に記述が多く残されており、その歴史の重要な証人となり得る立場にある。この国の後継国に生を受けた筆者としては渤海国の歴史と文化に興味と関心を持つ日本人がもっともっと増えて欲しいと念願する昨今である。

東京城（トンキンジョウ）

上京龍泉府を南北に貫く中央大街の東側を東京、西側を西京と呼ぶ慣わしから、上京龍泉府の東側一帯を東京城鎮と呼ぶようになった。満州国時代より市街地が上京龍泉府の東側に発展しているため、現地では東京城が上京龍泉府の代名詞のように使われている。しかし渤海国では首都が上京龍泉府に落ち着く前に一時期首都となったことがある東京龍原府（吉林省琿春市近郊）が別に存在するので、ここを東京城と呼ぶのは歴史学的には正確ではないが、この地を通る鉄道（牡丹江-図門線）の駅名も東京城駅で、「トンキンジョウ」は筆者にとっては幼少時の記憶として残っている特別なつかしい地名である。

東京城駅舎

というのは、戦前の満蒙開拓の時代、北海道内各地から東京城近郊に入植したある開拓団の中に筆者の伯母一家が参加していた。この一家とは当時から内地を遠く離れた外地における唯一の身内同士として、牡丹江、東京城間で両家族は頻繁に行き来していた。終戦前の一時期、思えば筆者 4 歳のころか、両親に連れられて東京城の開拓地を訪ねた記憶が残っている。雨上がりのある日、駅から開拓地までの数キロのぬかるんだ道を馬車に揺られてたどったとき、水溜りに浮かんだ油膜の鮮やかな干渉色の記憶、生みたての生卵をかけた卵かけご飯がとてもおいしかった記憶、などが鮮明に思い出される。

故郷訪問の旅

2000年８月、この伯母一家が属していた開拓団の旧地訪問の旅に同行して従兄弟たちと共に旧満州の各地を訪問する機会を得た。この旅で筆者の長年の念願であった生地牡丹江市をはじめ、東京城など思い出の地の情景を５０有余年を経てようやく確認できた。この旅で得た牡丹江および渤海国関連の情景の何枚かを文中、筆者が撮影した写真で紹介する。

開拓団旧地訪問団一行

満鉄社宅

（附）貞観年間（859～877）

第 26 回から 29 回までの渤海使は貞観年間に来航している。貞観という平安時代のこの年号は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災発生までは筆者の認識には存在しなかったが、これによって急に身近なものとなった。この東日本大震災では南相馬市、相馬市およびいわき市に住む筆者の身内も多く被災している。筆者も戦後、満州国から引き上げた後、いわき市の海岸近くに住み、ここを第二の故郷として育ったが、この辺はリアス式からはかけ離れた平坦な海岸線が続き、津波とは縁のない地域と思い込んでいた。しかし、貞観 11 年（869 年）に同じような規模の地震と津波が今回と同じ東日本を襲ったことがあると知った。実に今を去ること 1,142 年前のことである。平安時代、渤海使の時代が決してはるか彼方の過去ではなく、十分に現代に継がる身近な過去であることを渤海使と大震災によって認識させられたことを付記しておきたい。

＜参考資料＞

1. 上田　雄：渤海国- 東アジア古代国家の使者たち、講談社学術文庫（2004）。
2. 濱田耕策：渤海国興亡史、吉川弘文館（2000）。
3. 塚瀬　進：満州国-「民族協和」の実像、吉川弘文館（1998）。
4. 新野直吉：秋田美人の謎、中央公論新社（2006）。